

光明主義の名義宣揚

光明名義

この大正元年（一九一二）よりは、もっぱら光明主義の名をもって新法門を弘通するようになられた。

明治四十三年の名乗りは心光教会で、光明主義の名乗りは四十四年終りより兆し、もっぱら用いるにいたりしは大正元年よりである。

偶然にも、日本開国条約の翌年に誕生、西南役の片づいた時出家、日清役の年に釈尊正覚道場に詣うでて弘願をのべ、日露役の年に十二光仏名義の成文を発表された上人は、日本が創始時代の明治より進展時代の大正にかわつたこの年より光明主義と名乗られた。

大正元年筑後善導寺よりのご消息に、

「宗教が未開の時代より開明に進むにしたがつて自然に階級あることは、かつてお話いたせしことと存じ候。なれども世界通じて三階級にわかつ。初め、自然教、二、超自然教、三、円具教。自然教は幼稚なる知識の時代の宗教。神に自然界の日月山河八百万等を崇拜し、しかしかたちの上の幸福を祈り……（中略）

次にこの世は仕方がないから、未来死してのち極楽まいるの念仏と、この自然界をこえたるむこうに望みを立つるが超自然教である。ただ肉体の幸福を求めず靈魂の救いをもつばらにす、即ち浄土宗、真宗等の主義これなり。

世は文化とともに進みてまさに真の宗教、世に出でんとす、これぞ円具教すなわち如来光明主義である。その予言者はすなわち仏陀禪那である。予言とはこれより将来、この主義によつて救いの道をなすという、今日にして将来の宗教を世に紹介するものの謂なり。ゆえに予言者は旧来の宗教家には憎嫉せらる、蛇蝎視せらる。釈迦、キリストにしても、また法然、日蓮にしても一部の人には歓迎せられ、一部の人には憎まれ妨害を加えられし。これ免がれ難き理である。

さて円具教の如来光明主義は、客体の如来を必ずしも遠き彼岸に置かず、十方法界ことごとく活ける如来の天心光明中である。ただし衆生煩惱に障^さえられてこれを知見すること能わず、しかれども信心徹到すれば、如来の心光と衆生の信心とは三昧一致して光明を発得することを得。人の天然、すなわち生れたままの意識は本より劣等なり、無明なり、罪惡なり。心光獲得して始めて靈格となる。光明中の人と更生す。更生すなわち往生なり。

精神の更生である。更生したる後といえども煩惱なきにあらず。しかれども光明によりて自己を制裁するの力あり。また苦憂なきにあらず、苦悩あればこそ歎喜光を仰ぐの要あり。常に罪悪苦悩と健闘して不断光によりて勇気を鼓舞し、この生涯は煩惱と奮闘の生活である。すでに靈化しぬれば、昨日までの苦もまた苦と感ずるほどのこともなし。この土^ど一日は浄土百歳より勝^{すぐ}れたり、なんぞそれ、なんの苦かある。今は理想の浄土にありて生活し、しかしていよいよ命終らば実在の浄土に生ず。

かくのごときはこれ精神的光明主義である。仏陀禪那は光明主義の予言者である。」

——大正元年栃木県家中村渡辺厚盛法尼へ——

光明教義

大正二年（一九一三）（五十五歳）山本家や三好（炭坑主）家に結縁後、二月十四日より一週間、筑前福岡大善寺にて催された東筑二市四郡七十個寺院の教学講習会に講師に招待されて、はじめて光明主義教学の組織的な講義をされた。

これは当時聴講者の方で浄土哲学と名づけて、その七五音の頌に綴られし講義台本を、三十二頁に謄写にした。

後年にいたり、これを「諸教精要及宗趣」と「如來光明讚の頌」（十二光仏名義内容）と名づけ、よほど訂正したのが公刊された。（道詠集参照）

この講義題本となりし頌文には、はじめに教相と題して、まず三宝の加被を仰ぐ願文より始まりて「己が所信の相をのぶ」と宣し、衆生に天性、理性、靈性あり、宗教に自然教、超然教、円具教の三階ある教相を詳説して、自然教に多神教、一体教の二を明し、超然教に一神教、一体教の二を明して。猶太教、耶蘇教、娑羅門教より進んで、仏教にも空間的、時間的の二の隔絶せる浄土觀を明し、業感縁起、頼耶縁起を批判し、さらに第三の円具教にも汎神と統一超然神とを明し、天台、華嚴、真言、禪を批判して、光明主義の汎神超在の一体神を明し、神の円成実性、世界の因縁性、差別の衆生性と三展して、終局の心靈界に衆生を摂する如來三身に、遠心、求心の二種の理法あるを明して光明摂化の相を述べ。

次に宗趣と題して、宗に神人交感の心理、趣に求靈、更生の効果を示し、自然教、超然教よりさらに天台、華嚴、真言禪の宗趣を判釈し、いよいよ光明主義の宗趣を明して、自性の天真を開悟する理性宗と、救靈の恩寵にみたさるる感性宗の二を綜合したる開發靈化の相をのぶ。

次に本論に入り十二光の深遠なる玄義を説き、無量光に独尊、統攝、歸趣の三義、偏依円の三性、生産、摂取の二門を明し、無辺光に大円鏡、平等性、妙觀察、成所作の四智を明し、無碍光に神聖、正義、恩寵の三徳を詳説し、無対光に摂取の終局なる如來の自境界、極樂涅槃

槃城を明して常寂光土、智慧光土、蓮華藏界、密嚴淨土を極樂の同体異名として無住涅槃の度生を示し、炎王光に理事の二惑、邪定、不定、正定の三聚を明して除障、顕靈の相を示し、清淨光に六根淨を明して、五根に肉、天、慧、法、仏の五眼を明して、淨土勝妙の境を示し、歡喜光に法喜、禪悅の相を示して、人天より二乘、菩薩、仏陀の法樂を明し、智慧光に開示悟入の四相を詳説し、不斷光に廢惡進善の光用を明して、道德五重の動機を示して作仏度生の相を説き、難思光に信心喚起の因と縁、三心、四修、五行、五根、五力を明して覺醒の十信滿位を説き、無称光に見思の自覺業障苦悶、隨信隨法、七覺三昧の十安住に靈我更生を説き、超日月光に如來智悲長養により、内外魔の健闘、金剛の自律恩寵實現の身をもつて世を養う仏心仏行の行向地、十方三世仏同一無量光壽の極樂国土に歸趣の相を説く。

講習会出席者にわかった人はなはだ少なかったが、非常に感激開發したものもあつた。

『心にぞすむ』は靈応

その中に

この年春、上人の筆にて、觀音菩薩の図に宗祖法然上人の月影の歌を説きあかした一枚刷のものが、淨土宗伝道会より頒布された。

「ながむる人の心にぞすむとのすむ」ということに深意がある、これは信念ある人の心こころのみ靈応は宿り給うなれとの意である」

「自覺の曙光」

その後、筑前折尾正願寺で「自覺の曙光」の題下に五日間の講説あり、郡長、課長等の地方の有志めざむるものも相当にあつた。これを「自覺の曙光」という冊子として筑前遠賀で印刷し五月公刊された。

その頃は山口恵海師、裏辻賢光師、昌山戒全師等が随行した。

六月一日よりは太谷仙界師の随行で、波多野師の自坊筑前若松善念寺ご来錫、波多野師の発企にて、それぞれの向きへ案内して宗内の有志と市内の信者を集め、少数でしんみりとした中に「宗祖の皮髓」の題下に法然上人の道詠十二首につきてのご講話があつた。これには聴講者、特に中堅組の宗侶が非常に感動したもので、その一人は「始めて生きた法然上人を知り、浄土教義の甚深微妙なることを徹信することを得て嬉しさに堪えず、かかるご説法は到底ただの人のなし得べき所ではない、必定お上人は如来のご使者に相違ない」と敬仰おかなかつた。この感是一般の同感した所で、今まで上人の外形の行状のみ見ていた九州の宗侶に、これからは頓に上人の「法」をわが信仰として立つものが多くなつた。

信心歓喜して上人こそが如来様のお使と感じたその時の実感を、後日上人に告白した丹波師に對して、上人はいつものごとくつつましやかに、

「筑紫路にきたりてきよき同胞にめぐりあうことを得たるは、まことに嬉しきかぎり候。野衲など如来の使いなどとは意外のことに候えども、それでも永らく那落の底に沈みてなに分かは改悟のありてか、大みおやをなんとも慕わしく恋しくおもわるるは、懲りてたる結果ならんかと存じ候。」

ご分身を宿す

七月十四日から丹波師の住地香月小学校で、学校、炭坑方面の有志の間に五日間のご講演があり、夏中一日の暇もなく各地を転錫された。

上人「風の神をお宿し申せば身も心もすぐれず、大御親おみおやの如来の分身を頭に宿せば、身も心もともにありがたく、かたじけなく、悦びと平和と満足とにて暮され、無限の力と生命とを与えて下さる。人生の一大事を宇宙唯一の大御親なる如来のましますことを信じ、その大光明によつて復活し、光明の中に、日々に感謝の日暮しをすることである」。

じりじりと照りつくる南国九州二度目の夏も過ぎた。暑いほど稲穂の実りがたさを大ミオヤのみ恵みに感謝して、汗を感じる暇もない上人の忙しいご伝道に、信心喚起した人々の惜しむ別れをつけて、いつと会う瀬のあてもない、あづまじさして立たれることになった。



大正元年の上人（右は大谷師左は波多野師）

若松善念寺で上人送別の集いが渴仰かつこうせる道俗によつて催された。住職波多野師は一同を代表して「私は法然上人の流れを汲み、一枚起請のみ教えをありがたく信ずるものであります、このたび上人に会い奉つて、いよいよ念仏往生まちがいなきことを確信いたしました。それは今上人はまさしくわれ念仏によつて往つて来た。この道往けば誰も往けるぞということを実に証明して下さるようと思う。今上人に会うことは、七百年前の宗祖がさらに浄土からこの土に帰られたのにお目にかかる心地であります」とまごころこもる挨拶に涙をこぼした。

宗祖の皮髓

六月越後から京都にご転錫。山下管長貌下の命によりて、知恩院の教学高等講習会で「宗祖の皮髓」を獅子吼された。

これより先講師として大門了康僧正の外に上人が任命発表さるるや、世論に異議も多く知恩院役員の井上（改姓漆間）徳定僧正は宗務所に抗議を申込み、宗務内にも上人任命には異論がでたが、教学部長の竹石耕善師は「もし噂のごとく異安心か否かは巷説にまかせず、直接講述する所を検討して始めてきめたがよい。それには今度が最も好い機会であるから、かたがた反対者こそ聴講吟味した方がよい」との立て前で動かなかった。本山当局も「では話さしてみよう」くらいなつもりで、いよいよ開講となり、夏安居げあんごの講習会で二百名あまりの人が知恩院集会堂で聴講した。上人の訛のある低い声は折しも雨に消されてはなはだ聞きとりにくかったが、物柔かな中に氣高い威光の輝く上人の穏やかで力ある説法に、宗祖法然上人を今の世に拝するとき思いを呼びさまされて、体験と典拠とによりて説かるる宗祖の真髓に、始めて触るもの多く、聴講者の熱心と緊張とは類例なく、反対であつた井上僧正のごとき、最後列から席を第一列に進めて熱心

に傾聴するようになり、また衆議はまとまって、この説法を後世にのこすため書きとらせることになった。これを上人が添削したものを、聴講の耆宿^き岩井僧正（後の浄土宗管長）らの斡旋もあつて、総本山法教科から「宗祖の皮髓」と題して出版し（京都一音社から大正五年十二月より販売し）、これに先に抗議した井上徳定僧正は随喜言語に溢るる跋文を添えた。その一節に、

「山崎弁栄上人はいわゆる聖浄兼学の人なり。否近世の宗教哲学、動植物学、地文、天文学等の諸科学をまで涉獵し、世出世兼学の人なりとす。（中略）読者よろしく「人能念仏仏還念」の真修中に精読し給えかし。宗祖の皮肉骨髓はやがて読者の皮肉、骨髓となりて靈性開発し、靈格円成して三昧発得せん云々」と。

門跡隨喜

管長山下大僧正はご縁故深き東京浅草道林寺竹川老師に「宗祖の皮髓」をお手づからご郵送下されて、別にこの書に対する会心のお悦びをお音信^{たより}になり、

「特別の注意をもつてくれぐれ拝読するように」とお指図があつたので、竹川老師はこの老門跡貌下の稀有のご満足を拝承して、再読三読、宗祖の真精神に触れ奉るありがたさを貌下のご注意によってひとしお感じたことを、よく物語つては喜んでいた。

この本山夏安居講習に出席したまじめな宗侶は、念仏三昧の内感に頂く宗祖の真髓を伺つて、

信仰確立したものも多く、上人に帰依するものこれより特に増加した。

それから上人は伊勢にご転錫、三重教区教学講習会でもご講義あり、その後、東海道筋を巡教された。

道案内記・念仏道中・名所旧蹟

上人「安心起行の法をよく心得るは、浄土へ往く道案内記を心得ることである。目的地に行くにその道しるべ

は会得せねばならぬが、道しるべのみを知って、いまだ道を進まねば詮はない。東京から上京するに大津まで行った人は大津までを経験し、名古屋まで行った人は名古屋までを経験する。浄土の道案内者たる伝道家は、みづから念仏道中の名所旧蹟を実験してこれを説き、ひきいる信者をして道中の労を忘れて楽しき道に進ませねばならぬ」。

上人「念仏は呼吸で。念仏がたいぎで、つらいようでは、そりや病人で」。

今世で花・親の呼名

また「大般若六百卷大なりといえども枝、名号六字小なりといえども種、元祖選択の着眼ここにある。しかしながら種が種のままで

この世では開発せず、死んで浄土で開発するものときめるからいけない。今世で花開き、花一

代の散り終った後世の浄土で、上品の実を結ぶべきものである。今世で華開かねば彼の土において六劫をへて開くと」。

上人がミオヤ、み親というのを嫌える一僧に対し、

上人「アナタ、如来を親様といいますか」と反問、その人いわく「イエ阿弥陀と呼びます」。

上人「エライ他人気ですね、アナタは自分の父親を呼ぶのにその名を呼びますか、それとも、おとうさんといえますか」。

また「西方の弥陀は兆載永劫の間働いて、働きづめで、浄土をかまえられたというものの、そもそもだれの家で働いた。誰の土地を買って家を建てられたのじゃ。誰の家、誰の土地、その元をも認めよ」。

また「世の中には随分妙なことがありますねえ、自分はお念仏が嫌いでありながら、人にむかってお念仏をすすめるものがありますねえ、「己の欲せざる所、これを人に施すなかれ」というじゃありませんか」。

伝道精神

また「今の時代は悠長なことを許さぬ、伝道も正に鉄をもつて鉄を截るきことく血をもつて血を説かねばならぬ」。

また「伝道は一騎打ち。彼たおれねば、われたおれる覚悟はなくてはならぬ」。

また「古来の大宗教家は主義のためには、たびたび流罪入獄の憂き目に会った。弁栄は不徳にしていまだこれを経験しない」。

それから東上。下谷徳厚会を中心に東京付近を教化された。

禅僧受教

禅僧の小笠原師かねて上人の教をうけるようになり、徳厚会に留守していた。この人が会を盛大にする善意からではあったが、相場かなにかに手をだして、預っていた上人の伝道資財七、八百円も使いこんだ。上人は猪狩氏方にこの禅僧を呼んで懇々とその間違った点を教えられると、世智にたけ、酒量も多く、剛腹なこの禅僧は、上人のためにはかった失敗であるから悪くないといってなかなか強い。上人は理を説いて懺悔するように教えるけれども、どうしても悪いとはいわぬので、もてあまして、

上人「それでは法律に訴えますぞ」。

のちに温情玉のような上人のこの手強い態度を、「宗教家らしくもない」と是非する人に、上人「宗教と道徳と法律とは矛盾するものではありません」。

法律と宗教・鎗と荒砥

その臨濟僧はその後どうしても改悛の色を示さず、ついに法律沙汰になり、証人として公けの場所に呼ばれた時、上人はいでてその悪い所を述ぶるに、なんの躊躇もされなかった。ついにその兄弟にあたる人がその悪用された三宝物の半金かを出して示談になった。

他日、上人「監獄（刑務所）は個人の力では直せぬ罪惡を、国家の力で直してくれる所である」。

また「人の心霊は名刀のごとし、はなはだしきサビは荒砥を用いて除き去る」。

またある時上人「自分が仏画をかくことはよしあしだ」。

また「名譽とか利欲とかあればこそ、もろもろの憂いと怖れとはあれ、捨ててしまえば恐れも憂いもない」。